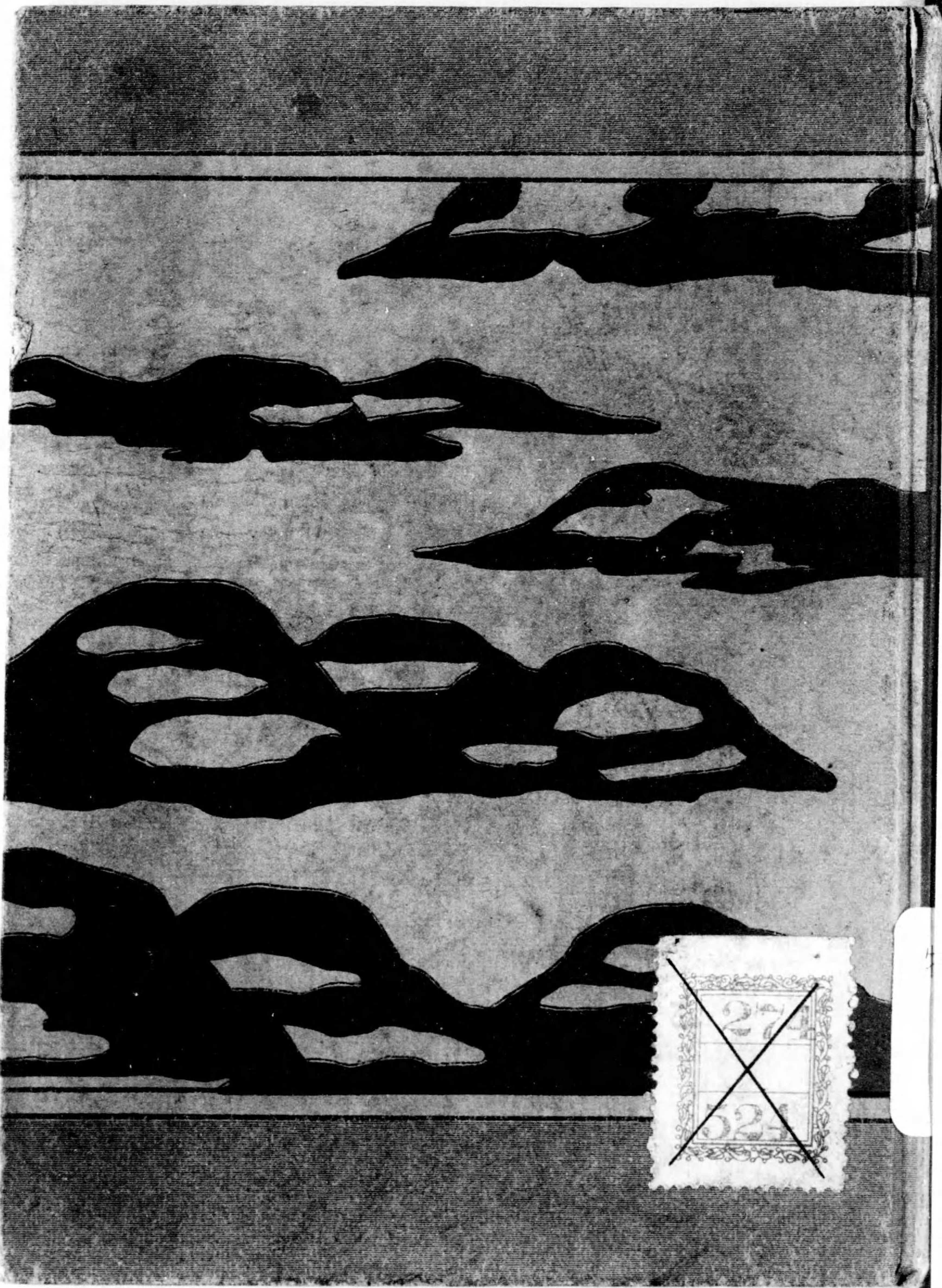
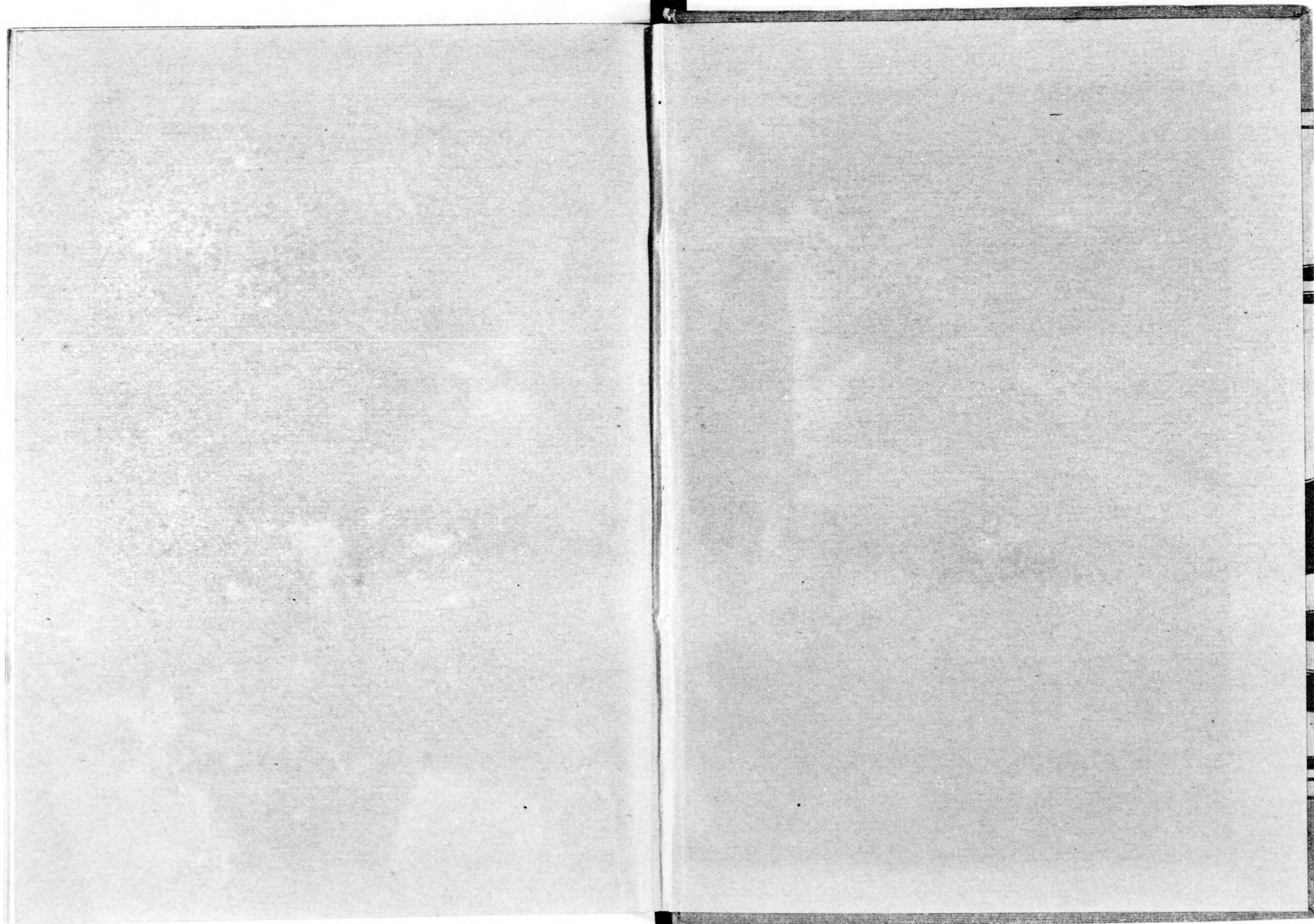


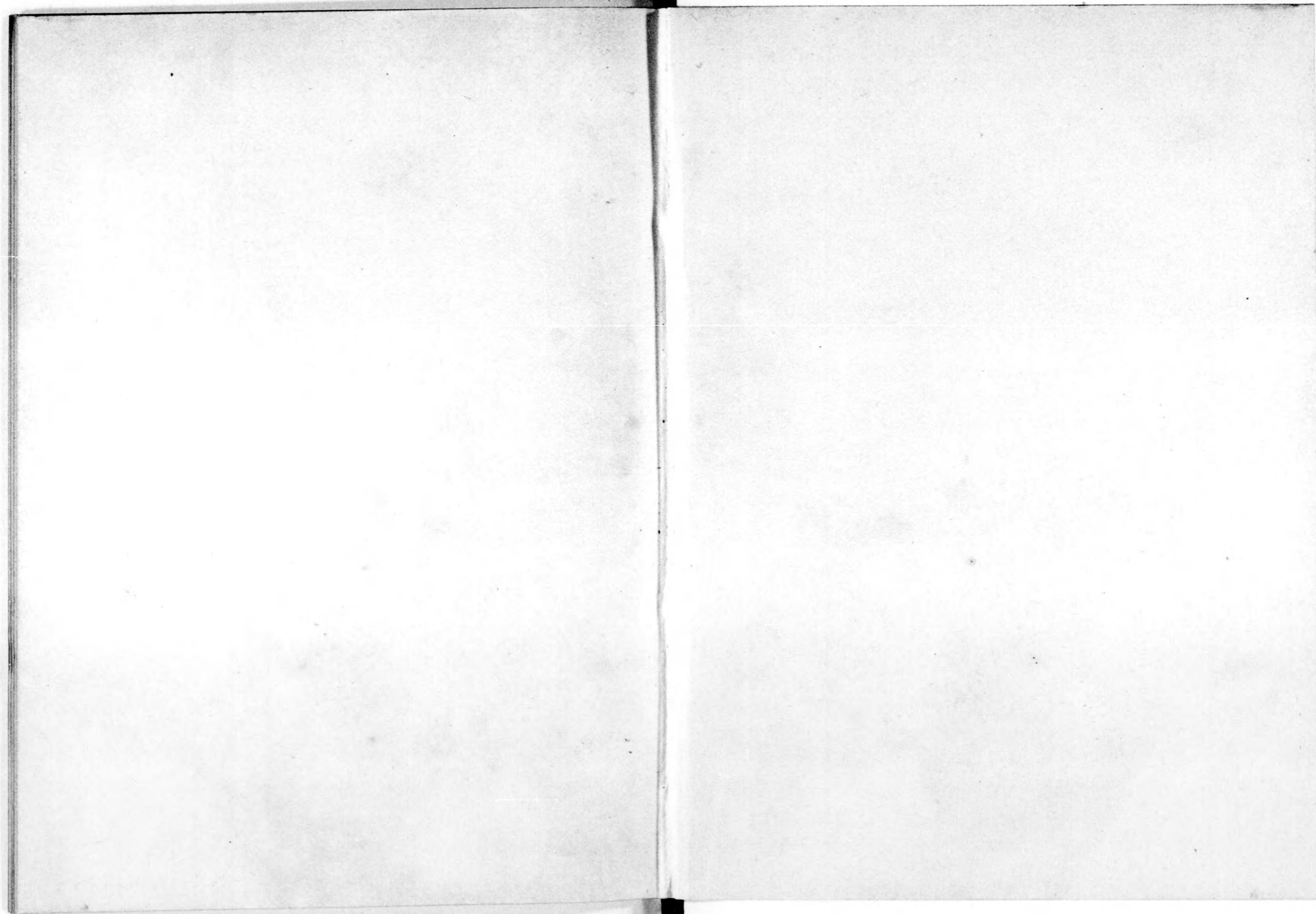
第



0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^m 50 1 2 3 4 5







特101

830



新伊勢
物總太田
藏初山書

譯語著店版



大正
2.11.13
内交



新譯伊勢物語

新譯伊勢物語の序に代へて
在原業平の文學を論ず

伊勢物語の作者に就いては諸説まち／＼であるが、余は之れを在原業平の作と信ずる。勿論その一部分には後人の附加したのも混入してゐるであらうが、大部分は業平の作であつてしかも業平が感情生活の自叙傳である。業平は平安の初期たる嘉祥仁壽の際を青年で過こし、貞觀の盛世を壯年で過ぎた。即ち淳和天皇の第二年から仁明文徳清和を歴て陽成天皇の第四年迄、前後五十六年

が彼れの在世期である。彼れは平城天皇の皇子阿保親王の子であつたが、夙に在原姓を賜はつて人臣の列に入つた。二十五歳で従五位下となり、三十八歳で従五位上となつた。官は右馬頭から右近衛中將となり、晩年には相摸武藏の權守を兼ねてゐた。物語を見ると、二條の皇后に失戀して東國から奥州へ漂泊したことが書いてある。伊勢へ鷹狩の勅使に行つて齋宮との情事を演じた事もある。小野に惟喬親王を訪うて山野の興を俱にしたこと、難波津に宴樂を張つたことなど、彼れの行事その者は凡て即興の詩であり、感傷の哀話である。

當時、業平の周圍は、奈良文學が終りを告げて新に輸

入された支那文學即ち隋唐の詩文が流行した時であつた。堂上の王子公孫學者達も皆争うて其流風に肖りまた肖らうとした時である。前には空海小野篁清原夏野などがあり、後には都良香菅原道真三善清行などがゐた、業平はこの間に崛起して、奈良後期以來、暫らく外國文學のためには壓倒されてゐた和歌の頽勢を挽回し、更に歌文の上には新しい平安體の先蹤を爲してゐる。試に伊勢物語一篇を取つて之れを奈良時代の散文に比較して見ると、業平が如何に文藝上の創爲力に富んでゐたか分かる。勿論前代簡朴の餘風を承け繼いでゐるには相違ないが、そのうち自り來るべき平安文藝の大勢を暗示してゐる。彼の

平安時代の代表とも云ふべき「源氏」「榮花」の如き物語が、その動機に於いても文體趣向に於いても伊勢の一篇に負ふ所の多いのは具眼者の既に認めてゐる處である。翻つて業平集及び伊勢物語に表はれた彼れの諷詠に見るも、これ又平安和歌の先導を爲すものであつて、之れを奈良時代の諸歌人の和歌に比するに、其形式も情致も全く別様の觀がある。就中その整調の優美を旨としたこと、并に戀愛と無常と哀思とに殆んど感情の惑溺を盡さうとした點など、所謂平安文學の標型は夙く既に業平によつて決定されたと云へる。即ちこの意味に於いて彼れは彼れ自身の才情を渾洒して一氣直ちに中古文學の創始者たる位

置を占めたものである。古今集以後鎌倉を経て、徳川時代より更に明治の前半に至る迄、多少の例外はあるにしても、和歌と云へば、その風體は纖巧であり、その旨意は艶媚なものであると云ふことに概念を作られてゐたのも、詮ずれば其發蹤は紀記にもあらず、萬葉にもあらず、大部分業平の伊勢物語に由來すると云へる。古今集の紀貫之は爾後の多くの歌人が崇拜して歌壇の第一人者とする處であるが、併し古今集の歌風を決定した眞の動力は業平であつて、貫之はたゞ一個の批評家たるに過ぎない而して古今集は以後の七代集を決定し、七代集はまた以後の八代集を決定し、斯くの如く逐次相制し相傳へて遂

に後年の堂上風にまで壓縮されるに至つた。しかし余は之れを以て業平の罪に歸さうとするものではない、業平以後業平のやうな創爲力に富んだものが出なかつたことを遺憾に思ふ。俊成定家爲家なども歌の名人であつたには相違無いが、平安以後の型を破れなかつたのは、その規模の小なる所以では無いか。徳川時代に至つて僅に香川景樹の現はれたのを異とするけれども、之れとても要するに古今集の一脱化に過ぎない、平安以後今日迄、和歌の傳統は一千年餘を経てゐる。然るに依然として歌は纖弱なもの艶媚なるものとの感を抱かしめつゝあるのは、即ち愈業平その人の大を證する所以である。去つて萬葉

集の諸作を見れば、人麿、憶良、旅人、家持、何れも所謂平安朝以後の和歌とは全く異つた概念の下に彙類される。和歌は決して遊溺の具では無い、纖弱艶媚のみがその本體ではない、業平はこの點に於いて萬葉に囚はれなかつたことを偉とすると同時に、偶然にもその偉なる點を以て後世に累を及ぼしてゐる。

業平の性情并びにその生活の如きは、伊勢物語を見れば分かることであるが、彼れは飽くこと無きその時代の耽溺者であつた。感情の子、自然の子、本能の子而して之れ等の性情を更に歌といふ遊藝の三昧境に追ひ込めた人である。物語に表はれてゐる惟喬親王との關係、乃至

二條の皇后に對する失意の諸篇の如き、或る人は之れに依つて業平を不平の反動兒としようとするが、余は之れ等の裏面的觀察に同意し難い。矢張之れ等も業平が感情の子自然の子本能の子たる所以を發揮したものであるとする。遮莫、平安時代の人情は伊勢物語一篇に依つて見るも如何に淫蕩を極めてゐたか、如何に放縱を極めてゐたか、近時吾れくは文壇に於いて耽溺といふことを聞いた。又歡樂といふこと、遊びの悲哀といふことを聞いた。併し事業は言葉以前に存在してゐる。余は端無く伊勢物語を譯して人情に古今無きことを思はざるを得なかつた。

余が伊勢物語の文辭に注意したのは久しい以前からである。而してその文の簡素にして旨意の含蓄に富めることに常に驚かされてゐた。どうか之れを今の言語に飜へして見たい、斯う思つたのは四年前のこと、當時或る文學雜誌に數回抄譯を試みたことがあつた。今回全篇を纏めることにしたが、しかし纏めて見ると、折角の名篇を色も香も無いものにして了つたやうに覺える。幸ひに原文を讀むものゝ手引になつたらば満足である。なほ文は出来るだけ原文の辭句を逐つた積りであるが、多少自分の意を加へた處も無いではない。歌はもとの位置にその儘の形で入れて置いた。

明治四十五年三月



昔、或る男が、元服したので、奈良の春日へ領地の檢分を兼ねて鷹狩に行つた。其處のある家に若い姉妹の女が住んでゐた。ふとした機會に覗いて見ると、意外にも土地に不似合な美人であつたから、つひ迷ひ心地になりやがて着てゐる狩衣の裾を裂いて



春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り
しられず

と、書いて投げ入れた。——信夫摺の狩衣を着てゐたのだ。あの誰れか「みちのくのしのおもちすり誰れ故に亂れそめにしわれならなくに」と歌つたことも思ひやられる。あはれに面白い趣向を女もさぞ身にしみて感じたことであらう。昔は出會頭にも斯ういふ風流な情事をしたものだ——。

昔、或る男があつた。都が奈良から遷つたばかりのこ

とで、京都にはまだ人家の少い時分であつた。そこの西の京に一人の女があつた。容貌も秀れてゐたが、とりわけ優しい心を持つてゐたので、思ひを寄せる者も少くなかつた。この男も無論その一人であつた。或る時通つて行つて一晩打ち解けた話などして歸つて來たが、翌朝は恰好彌生の朔日で、空には蕭やかに小雨が降つてゐた。男は何と思つたのか

起きもせず寝もせで夜をあかしては春のもの
とてながめくらしつ
と、書いて女へ送つてやつた。

昔、或る男が、戀人の處へひじき藻を贈るといつて、
其の文の端に

思ひあらば葎のやごに寝もしなむひじきもの
には袖をしつゝも

と書き添へた。——二條の后がまだ御所に入内らない時分
のことである——。

昔、東の五條に皇太后の御所があつた。その西の方の
部屋に一人の女が住んでゐた。或る男がかりそめに訪ね
などしてゐるうちに深い交情になつたのを、その正月の

十日頃、女はふと姿を隠してしまつた。居處は分つてゐ
るが、遠慮すべき所なので、つひ其の儘つらい思ひを抱
いて過ぐしてゐた。翌年の正月、梅は再び盛りになつた
男は懐かしい追憶を辿りながら、西の部屋に行つて彼方
此方眺め廻したが、もう見違へるやうなうら寂しい景色
に變つてゐた。男は泣いてしまつた。泣きながら荒れた
板敷に白々と月のさし入る迄臥せつてゐた。去年の思ひ
出は自づと歌になつた。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我が身ひと
つはもとの身にして

夜がほのかに明け放れる頃、男は萎れて家へ歸つて來た

昔、或る男が、東の五條邊の女へ忍んで通つて行つた人目立たない處であつたから、門を這入らずに、小供の踏み穿けた土塀の破れから通つた。餘り足が繁くなつたので、女の親が聞きつけて通路へ夜番を置いたから、男は行つても逢はずに歸つた。

人知れぬわが通ひ路の關守はよひくごとに打ちも寝なむ

後で女は其のことを聞いて、さんく父の仕打を怨んだ間もなく親も寛大に見るやうになつた。——これも二條

の后と或る男との間にあつた物語である——。

昔、或る男があつた。容易に人に逢はれない身分の女に幾年も通ひつゞけて、辛つと納得させたから、盗み出して、夜伴れて遁げた。芥川と云ふ河の岸傳ひに行くと、草に置いた露を女は怪しみながら、あれは何？……、と尋ねるのであつた。けれども行先も遠く、夜更ではあり、ことにひどい雷雨にはなつた。もとくそんな事のあらうとは夢にも知らないから、恰好其處に荒れた倉のあるのを幸に、女を奥に押込め、男は戸口に、弓、胡籛、を

用意して一心に夜の明けるのを待つてゐた。………すると
鬼が出て来て女を一口に食つてしまつた。嗚乎とばかり
男は叫んだが、雷鳴が騒々しいので聞こえなかつた。漸
く空が白んだから、見ると女はゐない、男は足摺りをし
て泣いたけれども甲斐が無かつた。

白玉かなにぞと人の間ひしとき露とこたへて
消なましものを

——二條の后がまだ娘でゐた頃のことである。鬼は兄の
堀河大政大臣國經であつた——。

昔、或る男が都の住居も厭になつたので、東國の旅へ
とさ迷ひ出た。伊勢尾張の海岸を行くと、白い浪が男の
眼に懐かしく映つた。

いとゞしく過ぎにし方のこひしきに羨ましく
もかへる浪かな

昔、或る男が失意の果てから自暴自棄になつて、もう
都にもゐまい、何處か變つた處へ行かう……と、いふので
旅に出た。信濃の淺間山に細く煙の立つのを見て、彼れ
は先づ旅の寂しさを知つた。

信濃なる淺間が岳にたつけむりをちかた人の
見やはとがめぬ

勿論二三人の同伴はあつたが、案内も覺束ないので迷ひ
がちな旅であつた。三河の八橋といふ處へ出ると、河は
幾つにも岐れて水には皆丸木橋を渡してあつた。澤の樹
蔭を籍いて晝餉を食べた。澤には杜若が美しく咲いてゐ
た。伴の一人がかきつばたを頭字にして歌を作れと云つ
たので、男は

からごろもきつゝなれにし妻しあればはるく
來ぬる旅をしぞおもふ
と、詠んだ。伴の者は今更のやうに旅が悲しくなり、涙

は落ちて飯を霑すのであつた。行くうちに駿河へ出た。
うつの山へかゝつて自分達の行く方を見ると、暗い細い
山路に蔦や蘿が茂り合つて如何にも心細さうである。皆
どんな目に出逢ふかと怖づく歩いて行くと山伏が來た
如何して斯んな處に………とよく見れば知人であつたか
ら、京へ言傳てる手紙を書いた。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人に
あはぬなりけり
富士の峯を見ると、もう五月の暮れであるのに雪が白く
降つてゐた。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだ

らに雪の降るらむ
 武藏と下總の境に隅田川といふ大きな河が流れてゐた。
 船を待つ間、人達と河岸に居群れて、自分達の旅を振り
 かへりながら、斯んなに遠くにまで来てしまつた……
 と悲しみ合つてゐると、渡守の爺さんは、早う乗れよ日
 が暮れるぞ……、と急ぎ立てるので、船へ移つた。
 佗しさに水を眺めてゐる人達の顔は蒼かつた。思へば
 皆故郷には待つ人が無いではないに……、と、茫然して
 ゐると、眼の前の水を掠めて白い鳥が紅い嘴と脚とを見
 せながら魚を啄つてゐる。京では見ない鳥であるから、
 渡守に尋くと都鳥だと云ふ

名にし負はゞいざ言問はんみやこ鳥わが思ふ
 人はありやなしやと
 船中は歌につまされて又涙に泣きぬれた。

昔、ある男が武藏の國へ漂泊つて行つた。其の國で或
 る女の處へ通つた。女の父は他へ嫁がせようといふのを
 母は藤原を名乗る身分であつたから、この男へ娶はせよ
 うとした。やがて母親から男へ云つてやつた。

み吉野の田の面の雁もひたぶるに君が方にぞ
 寄ると鳴くなる

親達の家は入間郡の吉野といふ處にあつた。男は返事にわが方によるといふなるみ吉野の田の面の雁をいつかわすれむと、云つてやつた。——旅に出てまでも、此の男は、さういふ情事ばかりしてゐた——。

昔、或る男が東國の旅から友人の許へ送つてやつた。忘るなよほどは雲井にへだつとも空ゆく月のめぐりあふまで

昔、或る男があつた。他人の娘を盗みだして武藏の國へ駈落ちしようとしたが、國守に抑留られた。男は女を草の中へ隠して逃げてしまった。折から通行人が、そら盗人が隠れた……と騒ぎ立て、野原を焼き掃はうとした。女は草の中から

武藏野は今日はな焼きぞ若草の夫もこもれり
われもこもれり

と、泣き悲しんだので、追手の人達に見つけ出されて、男と一緒に伴れもどされた。

昔、武藏の男から、京の女へ「云へば恥かし云はねば
つらい」と書き、上封には武藏鐙として文をよこしたが
その儘ぶつり音沙汰が無くなつてしまつた。で今度は
女の方から調戯ふつもりで

むさし鐙すがにかけて頼むには問はぬもつ
らし問ふものうし

と、生半な心を云つてやつた。男は堪まらないほど悶
た

問へばとふ問はねばうらむ武藏あぶみかゝる

と、折にや人は死ぬらむ
悲しい歌を返してよこした。

昔、ある男が陸奥へ旅行した。其の國にこの京男を珍
しがつて、劇しい戀に落ちた女があつた。

なか／＼に戀に死なずは桑子にぞなるべかり
ける玉の緒ばかり

と、さも田舎女らしい歌を送つて切ない思ひを寄せたの
で、男も可憐らしくなり一夜訪ねて行つて寝た。夜半に
歸らうとするど女は又悲しがつて歌つた。

夜もあけば狐に食めなむ鶏のまだきに啼きて
夫なをやりつる

男はいよ／＼京へ歸る時期が來たので

栗原の姉波の松の人ならば都のつとにいざと
云はましを

如何にも田舎者過ぎる……といふ意味を云つてやつた。
女は——もとより歌の意味も分らなかつたと見ゆる——
途に自分を思つてゐてくれることゝ、嬉しさうにその事
ばかり口にしてゐた。

昔 ある男が陸奥にゐる頃、何でもない者の娘の處へ
通つてゐたが、親には似す不思議に何處か平凡らしくな
い處があつた。男は試さうと思つたのか
忍ぶ山しのびて通ふ道もがな人の心の奥も見
るべく

謎のやうに云ひかけてやつた、女は身にあまる冥加を感
じたが、斯んな田舎者が……、と恥かしさうにして遂そ
のまゝ返歌もせずにもた。

昔、紀有常と云ふ人があつた。三代の天子に仕へて振

つた威勢であつたが、終りは時世の變に出逢つて大きに
 零落れてしまつた。しかし人品も卑しからず、人と違つ
 て趣味も豊かであつたから、覺束ない生活をして居なが
 らも、心は昔のまゝで、一向世間の事も知らずに居た。
 年來親しんだ妻も、だんだん夫に遠ざかつて行つて、終
 ひには尼になつて姉の居る寺へ行かうとした。こんな仕
 打をする妻が何で可愛からう。併し男はこれがもう最後
 のわかれかと思ふと、哀れではあるが、形見にやる何物
 も有つて居なかつた。仕方なく親しい友人へ、斯く斯く
 の譯で……と書いて奥へ

手を折りて經にけることを數ふれば十と云ひ

つゝ四つは經にけり
 友人は氣の毒に思つて、寢具迄も贈つた
 年だにも十とて四つは經にけるをいく度君を
 たのみきぬらむ

男は喜んで

これやこの天の羽衣うべしこそ君がみけしに
 奉りつれ

猶うれしさが禁めがたくて

秋やくる露やまがふと思ふまであるは涙のふ
 るにぞありげる

昔、久しく來なかつた人が、櫻の盛りに見に來た。
 仇なりと名にこそ立てれさくら花年に稀なる
 人もまちけり
 するとその人は返歌に
 けふ來ずばあすは雪とぞふりなまし消えずは
 ありとも花と見ましや

昔、半可通の女があつた。近くに住んで居た歌よみの
 男を試みようと思つて、菊のあせかゝつたのを折つて、
 くれなるに匂ふはいつら白雪の枝もとをゝに

降るかともみゆ
 と云つてやつた。男は女の仕かけた心を知らないではな
 いが、わざと焦らすやうに
 くれなるに匂ふが上の白雪は折りける人の袖
 かとぞみる
 と、詠んでやつた。

昔、或る男が女官の許に仕へてゐる女と知己になり、
 暫くして仲たがひになつた。毎日同じ所に——男も同じ
 御所に仕へてゐたのだ——勤めてゐるので、女はなつか

しきうに男をさこに秋波あきなみしたが、男をさこは一向いっかうに知らぬ風ふうをして居ゐた。

天雲あまぐものよそにも人ひとのなりゆくかさすがに目めには見みゆるものから

恨うらみめしい歌うたをよこした。男をさこは

ゆきかへり空そらにのみして經ふることは我わがゐる

山やまの風かぜはやみなり

ど、返歌へんかした。多おほくの男をさこを持もつて居ゐた女をんなであつた。

或あるる宮内官ぐたいくわんの男をさこが、大和やまとの女をんなを見みそめて、通かよつて行ゆつ

て泊とどつて居ゐた。暫しばくして男をさこは職務しよくむがあるので、歸かへらなければならなかつた。途ちう中ちゆう三さん月げつのこゝで楓かへでの若葉わかばが紅あかくなつてゐるのを、折をり取とつて女をんなのこゝへ

君きみがため手た折をれる枝えだは春はるながらかくこそ秋あきのもみぢしにけれ

と、詠よんでやつた。女をんなからの返歌へんかは京都きやうとへ着ついてからに來きた。

いつのまにうつろふ色いろのつきぬらむ君きみが里さとには春はるなかるらし

昔、ある男が、或る女と深く思ひあつて、何事もなく
過ぎしてゐたが、どうした風の吹き廻しか、一寸したこ
とから女は男を疑つて、出て行かうとして

いで、往なば心かろしと云ひやせむ世のあり
さまを人はしらすて

と、書き遺した、男は見て驚いた。そして何も自分に覺
わのないのと思ふと、一時に悲しくなつて、門から駈
け出して、後をあちこちと眺めやつたが、もう行衛が分
らずになつた。家へ歸つて来て

思ふかひなき世なりけり年月をあだにちぎり
て我やすまひし

と歌ひながら、茫然空をながめてゐた、

人はいざ思ひやすらむ玉かづらおもかげにの
みいで、見えつゝ

斯うも歌つて見た。久しく経て女も以前を思ひ出して、
情も悔も耐へきれなくなつたであらう

今はとて忘るゝ草のたねをだに人の心に播か
せずもがな

男は返しの歌を詠んだ。

忘れ草植うとだにきくものならば思ひけりど
は知りもしなまし

二人は又前よりも一層堅い約束をする間となつた。でも

男はまだ不安心に思つたのか

忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけ
に物ぞかなしき

と今の心持をそのまゝ云つてやると、女はまだ疑はれる
のかと

中ぞらに立ちゐる雲のあともなく身の果敢な
くもなりぬべきかな

と訴へては見たものゝ、そのうちに時節が来て、又もとの
夫婦になつたが、例の女の癖から再び別れる中となつ
てしまつた。

昔、これと云ふこともなくて、絶れてしまつた交情で
あつたが、まだ忘られない處があつたであらう、女の方
から

うきながら人をばえしもわすれねばかつ恨み
つゝなほぞ戀しき

と云つてやつたので、男はそれみよがしに
あひはみで心ひとつを川島の水の流れて絶え
じとぞ思ふ

もう逢ふことはやめにして、心で思つてゐようと云ふ意
味を云つてやつたが、つひまたその晩行つて寝た。いろ
いろ寢物語などしたあげくに男が

秋の夜の千夜をひと夜になすらへて八千夜し
寝ばや飽く時あらむ

女は

秋の夜の千夜をひと夜になせりともことば残りて鶏や鳴きなん

以前よりもしみじみした交情になつて、睦ましく通つた

昔、田舎商賣をして居るものゝ子供があつた。隣り同士で睦ましく井戸端に遊びあつて居るうちに、いつか成長して互に恥ぢらふ中となつた。男はこの女を……と

思ふと、女もこの男を……と思つて、両親の合はせてくれるものは承知しないで居た。そのうちに男の方から筒井づゝ井筒にかけしまろがたけ生ひにけら

しな相見ざるまに

と云つて來たので、女は

くらべ來し振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰れかなづべき

と返した。どうく二人は思ひ通り夫婦になつた。幾年か経て女は親を失つて、生活のたよりもなくなつた。で男は斯うして二人空しく、日を暮しては居られぬと云ふので、河内の高安郡へ行商に出懸けた。そこである女を

見そめた。それとは知つて居ながら、女は悪い顔もせず
に男を出してやつたが、却つて男の方から、もしや他に
男でも出来たのではないかと疑つて、出て行つた風をし
て庭の木の蔭にかくれて見てゐた。すると女は美しく化
粧をして、夫の行つた方を眺めやりながら

風ふけば沖つ白浪立田山夜半にやきみがひと
り越ゆらむ

となつかしさに歌ふのを、男は聞いて憐れになり河内
へもあまり通はなくなつた。

さて、まれに彼の高安(河内)に行つてみると、初めは心
く、化粧などとして居たが、今はもうだらしのない巻き

つけ髪に、長い顔をさし出して、しかも飯を手盛りにし
てゐるのを見ると、もういやになつて行かなくなつた。

女はせめて大和の方の空を眺めては

君があたり見つゝを居らむ伊駒山雲な隠しぞ

雨はふるとも

と心まちに待つて居た。辛つと、來ると云ふ便りがあつ
たから喜んで居たが、それも甲斐なく過ぎ去つた。

君こんと云ひし夜ごとに過ぎぬればたのまぬ

ものゝ戀ひつゝぞをる

けれども男はもう行かうとはしなかつた。

昔、ある男と女が田舎に住んで居た。男は宮仕のため
に別れがたい仲を忍んで京へ上つたまゝ、三年になるけ
れども歸つて來なかつた。女はまち詫びて居たが、他に
も親しく言ひ寄る男があつたので、ふとその方に心を引
かれて今夜逢はうといふ約束をした。その晩あやにくと
男は京から歸つて來て、直ぐに女の家を叩いた。け
れども中からは開けようともせず、

あら玉の年の三年を待ちわびてたゞこよひこ
そ新枕すれ

と歌つた。もう今夜となつては仕方がないと云ふのであ
る。男も残念に思つたであらう

梓弓眞弓つき弓年を経て我がせしがごと美し
みせよ

心變りをするなど、捨て言葉をのこして立ち去らうとし
た。女は恥ぢて

梓弓ひげごひかねと昔より心は君によりにし
ものを

と悔いたけれども男は歸つてしまつた。女は悲しくなり
息をきつて後を追つた。併しもう追ひつけなかつた。や
うやう清水の湧いて居る所へ駆けつけて、そこの岩へ指
の血で書きつけて死んでしまつた。

あひ思はで離れぬる人をとゞめかねわが身は

今ぞ消えはてぬめる

昔、男があつた。否とも云はなければ、快く諾しもしない、しかし如何しても捨てるには惜しい女の許へ云つてやつた。

秋の野に笹わけし朝のつゆよりもあはで寝る夜ぞ霑ちまさりける。

女からは
みるめなきわが身を浦と知らねばや離れなで
海人の足たゆく来る

昔、ある男が五條の女を他人に奪られたので、氣の毒に思つて慰めてくれる友人の許へ云つてやつた。

思ほえず袖に港のさわぐかなもろこし船のよ
りし許りに

昔、男が女の所へ一晚通つたぎりで、そのまゝ行かなくなつたから、女の親が憤怒つて、手洗場の貫簀——手洗の水の飛び散らぬために盥の上に渡してあるもの——

を取つて抛げつけた。するとしくしく泣いて居る女の顔が、盥に映つた。

わればかり物思ふ人は又もあらじと思へば水の下にもありけり

男は聞いて憐れになつた。

水口にわれや見ゆらむ蛙さへ水の底にてもろ
聲に鳴く

昔、ある多情の女があつた。男を振つて出て行つたのに、男はそれとは知らず

などてかくあひがたみ(籠)ともなりぬらむ水も
らさじと契りしものを
随分とお人好しの男であつた。

昔、東宮の母后が催された花の賀宴に、招かれて行つた近衛中將が歌つた。

花にあらぬ嘆きはかつてせしかどもけふの今
宵に似る時はなし

昔、ある男が稀に逢ふ女の處へ云つてやつた。
 あふことは玉の緒ばかりおもほへてつらき心の長く見ゆらむ

昔、ある男が宮中にて若い女房達のゐる前を通つた。
 女房達は何か男に怨みがあつたのであらう、あれの成れの果てを見てやらう………と云ひかけたから、男は罪もなき人を呪咀ばわすれ草おのが上にぞ生ふと云ふなる
 と云つたので、女は又一層嫉く、思つた。

昔、ある男がかつて馴染であつた女に、幾年か經つていにしへの倭文の緒環くりかへしむかしを今になすよしもがな
 と、云つてやつた。女は何とも思はなかつたであらうか

昔、ある男が攝津の兔原郡に住んでゐる女の處へ通つたが、もう今度歸つたらば又と來まいと云ふ様子を見て女は恨めしさうな顔をした。男は

葦邊よりみちくる汐のいやましにきみに心を
おもひますかな

女は

こもり江に思ふ心をいかでかは船さす掉のさ
して知るべき

わたしには推量できない………と云ふ心を歌つた、
田舎女の歌とすればまあ恕せるであらうか——。

昔、ある男が薄情な女へ

いへばえに云はねば胸のさわがれて心一つに

なげくころかな

——思ひつめた未の歎聲であらう——

昔、ある男が不本意ではありながら絶れてしまつた女
へ宛て、

玉の緒を交緒によりて結べれば絶えての後も
逢はんとぞ思ふ

昔、ある男が、もしや忘れてしまひはせぬか………と
云つて來た女へ

谷せばみ峰まで這へる玉かづら絶えんと人を
われ思はなくに

昔、ある男が多情な女に逢つた。不安心に思つたであ
らう

われならで下紐とくなあさがほの夕かげまた
ぬ花にはありとも

女は返しに

二人して結びし紐をひとりしてあひ見る迄は
どかじとぞおもふ

昔、紀有常が他所へ行つて久しく歸らなかつたから或
る男が云つてやつた。

君により思ひならひぬ世の中の人
はこれをや
こひと云ふらむ

有常の返しに

ならばねば世の人言に何をかも戀とは云ふと
問ひし我しも

昔、西院帝といふ方があつた。その内親王の崇子とい

ふ方が薨去した。御葬送の儀式を見やうと云ふので、宮の隣に住んで居た或る男は女車に相乗で出かけた。久しく経つても行列は出て来なかつたから、待ちわびてもう歸らうとして居ると、天下の好色漢源至と云ふこれも矢張り葬式見物に来て居るのが、眼さどく見附けて此の女車の方へ寄つて来た。いやらしく媚態をしてゐると思ふと、螢をとつて車の中へ投げこんだ。車内ではひよつととして螢の灯火で見られはしないかと、慌て、消さうとした。

出で、往なば限りなるべし燈火悉き年へぬる
かど鳴く聲を聴け

至は返しに

いとあはれ鳴くぞきこゆるともし火のきゆる

ものともわれはしらすな

と、詠んだ。——天下の好色漢の歌としては餘り平凡なものだ——。

昔、ある若い男が、満更ではない女——自分の家の下婢——を戀ひした。親は利巧ものであつたから、もしや斯うして陥り込むやうなことがあつてはと女を他へ追ひやらうとした。とは云へさうも出来ず、住苜して居た。

男はまた親係りの身分だから、女を留めて置く権力もな
い、卑賤な女の境界は猶更主人に抵抗する力もなかつた
さうかうしてゐるうちに二人の戀は愈々深くなつてしま
つた。親はもう堪へきれないで俄に女を追ひ出した。男
は血を吐く思ひではあるが、引きとめる術もない、仕方
なしに人を附けて途中まで見送らせた、女はあの方に見
せて呉れるやうにと云つて、別れ際に

いづこ迄送りはしつと人とは、あかぬ別れの
なみだ河まで

と、自分の今はの離愁を歌つた。男はそれを見て泣きな
がら

いとひては誰れか別れのかたからむありしに
まさるけふは悲しも

と、詠んで絶息けてしまつた。親は慌て、そんな積り
で云つたのではなかつたに、斯んな事にならうとは夢に
も思はなかつた……と悲しんだ。實際正體も失くなつて
しまつたから、驚いて神佛に助けを祈つた。その日の暮
がた息が絶れて、翌日の晩の八時に辛つと生氣づいた。
昔の若い人はさういふ好色な悲劇をした—今の老人たち
は決してそんなことはしない—。

昔、姉と妹があつた。姉は卑賤な貧乏人を夫にもち、妹は高貴な金持を夫に有つて居た、姉は師走の大晦日に袍の洗ひ張りをしてゐた。

勿論貧乏は觀念して來たものゝ、もともと生まれは卑しくないから、張り損ねて肩を破つた。女は途方にくれて泣いて居た。

妹の夫はそれを聽いて氣の毒に思つて、自分の袍のまだ新らしいのを明日の間に合せに見つけ出して贈つた。

むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

昔、ある男が多情者と知りながら、或る女と知己になつた。さう悪くもなかつたので、度々通つて行くやうになつたが、それでも矢張り不安心なところがあつたので寧ろ思ひ切つてしまはふとしたが、それも爲すに居た。二三日は用事があつたから、氣がかりではあるが、行くことも出來ずに居た。

出で、來しあどだに未だかはらじをたが通ひ路と今はなるらむ

不安な疑ひから詠んだのである——。

昔、賀陽親王といふ方があつた。非常に女に同情を有たれた方で、何くれと恵みをかけて多勢の女を使つて居た。その中には優れた美人もあつて、多くの若い男達を騒がせた。自分ばかりと思つて居ると、他にも聞きつけて文をやる男もあつた。ある男はほとゝぎすの繪を書いて、

ほとゝぎす汝が鳴く里のあまたあればなほう

とまれぬ思ふものから

と、云つてやつた。女は

名のみ立つ賤の田長はけさぞ鳴くいほりあま

たに疎まれぬれば

時節は五月であつた。男の返しに

いほり多き賤の田長は猶頼むわがすむ里に聲

したえずば

昔、ある男が地方へ赴任する人を招いて饞別の宴を張

つた。親しい仲であつたから妻迄も出して杯を酌させ、

女の装束を贈物にしようとした。主人の男は裳の腰に歌

を詠んで結びつけた。

出で、ゆく君がためにと脱ぎつればわれさへも(裳)な

くなりぬべきかな

昔、或る男に、或る家の秘藏娘が戀ひ焦れて、如何か一言物を云ひたいと思ふけれども、耻かしくてそれもせず居た。女はとう／＼戀病ひになつた。もう今にも死ぬと云ふ時に漸くその事情を告げたので、親は憐れになり早速男を召びにやつた。慌て、駈けつけた時にはもう女は死んでゐた。それから後男も沈みがちな日を迎へるやうになつた。

六月も暮れ近く暑さも烈しい時分のことであつた。夕ぐれは遊びにまぎれて居るが、夜が更けると、假寐してゐる

る眼の前を、涼しい風に吹かれながら、螢が舞つてゐる男は悲しくなつた。

とぶ螢雲の上まで往ぬべくば秋風ふくと雁に告げこせ

暮れがたき夏の日ぐらし眺むればそのこと、なく物ぞかなしき

昔、ある男が親しい友人を有つて居た。暫くも離れず慕ひ合つて居るうちに、遠國へ行くことになつたので、名残を惜しみつゝ別れてしまつた。幾年か経つてよこし

た手紙に、「久しく御無沙汰をしましたが、もしや御忘れ
になりはせぬかと悲しんでゐます、去るものは日に忘れ
ゆくのが世情でもございませうか………」と書いてあつ
たから詠んでやつた。

めがるとも思ほえなくに忘らるゝ時しなけれ
ばおもかげにたつ

昔、ある男が別れの餞をしやうとして人を待つて居た
が、來なかつたので
今ぞしる苦しきものと人またむ里をば離れず

訪ふべかりけり

昔、ある男が妹の美しくしい姿をして琴を弾いて居るの
を見て

うらわかみねよげにみゆる若草を人の結ばん
ことをしぞおもふ

妹

初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなく物を
おもひけるかな

昔、ある男が恨んで居る女を恨みかへして歌つた。
 卵子を十づゝ十はかさぬともいかゞたのまむ
 人のこゝろを

女

あさつゆは消え残りてもありぬべし誰れかこ
 の世をたのみはつべき

男

ふく風に去年の櫻はちらすともあなたのみが
 た人の心は

女

ゆく水にかすかくよりもはかなきは思はぬ人

を思ふなりけり

昔、ある男が、庭に菊を植ゑた人に、
 うつしうゑば秋なき時やさかざらむ花こそ咲
 かね根さへ枯れめや

昔、ある男が、人の處から飾粽を贈つて来たのに、
 あやめかり君は沼にぞまごひけるわれは野に
 出で、刈るぞわびしき

昔、ある男が逢ひ難い女に逢つて話をしてゐるうちに
鶏が鳴いたから

いかでかく鶏のなくらむ人しれず思ふ心はま
だ夜ふかきに

昔、ある男が薄情な女に

行きやらぬ夢路をたどる袂には天つ空なるつ
ゆやおくらむ

昔、ある男の思を掛けた女が、
と決つた時に 到頭我が物にならない

思はずはありもすらめど言の葉の折りふしご
とにたのまるゝかな

昔、ある男が寝ては思ひ、
歌つた。 起きては思ひ、思ひ餘つて

わが袖は草のいほりにあらねども暮るればつ
ゆのやどりなりけり

昔、人知らず物思ひに惱む男が、薄情な女へ云つてやつた。

こひわびぬあまの刈る藻にやどるてふわれから身をも碎きつるかな

昔 長岡といふ處に一風變つた色好みの男が住んで居た。その隣の宮方の御殿に、適宜な女房たちが多勢ゐた。ある日田舎のことでこの男は田に出て稻刈りの監督をしてゐた。すると女たちは、あらまあ稼ぎ人の色男………と口々に

調弄ひながら騒々しく集まつて來た。男は騒ぎに僻易して奥の方へ逃げこんでしまつた。けれども女達は荒れにけりあはれ幾代の宿なれや住みけむ人のねとづれもせぬ
ど、猶も戯れかゝつて、容易にそこを去らうともしないから、男は

律生ひて荒れたる宿のうれたきは假りにも鬼の集くなりけり

ど、調弄ひかへした。女たちは猶執固く纏綿つて、今度は一緒に落穂拾ひをしようと思ふのである。男はいよいよ困つた。

うちわびて落穂拾ふときかませばわれも田づ
らにゆかましものを

昔、ある男が京を厭つて東山に隠れやうとして歌つた
住みわびぬ今はかぎりの山里に身を隠すべき
宿もなからむ

陰鬱な生活はつひに病氣の因になつて突然息が絶えて死
んでしまつた。顔に水をかけるやら大騒ぎをしてやうや
う蘇生した。

わが上につゆぞおくなる天の河とわたる船の

かいの雫か

昔、ある男があつた。宮中の御用が忙がしいので、妻
にも自然疎遠になつてしまつた。その中に妻は眞實のあ
る人に伴れられて遠い田舎へ下つて行つた。やがて男が
宇佐八幡の敕使を承つてその地へ行つた。聞いて見る
と、女はある田舎官吏の妻になつてゐると云ふ。男には
好い見つけものである。さあその女に酌をさせよ。さも
なくば酒は飲まない……と云ふから。仕方なしに杯を
持たせて席へ出させた。男は肴料に出てゐる橋(密柑)を

取つて女に侑めて

さつきまつ花橋の香をかげば昔の人の袖の香

ぞする

と、歌つたし。女はありし昔を思ひ出して、世の中があら
れになり、終に尼になつて山に入つた。

昔、ある男が築紫へ行つた。ある家の前を通ると、簾
の中から女の聲で、あの好色家らしい男は………と云
ふのを聞いて、その男

染川を渡らむ人のいかでかは色になるてふこ

となかかるらむ

—染川は築紫にある川である——女

名にしおはゞ空にぞあるべきたはれ島浪のぬ
れぎぬ着ると云ふなり

昔、男から久しく疎遠にされてゐた女があつた。さう
賢い性質でもなかつたと見えて。つまらない者に誘はれ
て田舎へゆき、下婢に落ちぶれて居た。男はある機會か
ら偶然その女に邂逅ひ飯の給仕などしてもらつた。女は
長い垂髪を絹に包んで、衣服は遠山の模様を染めた青い

摺衣を着てゐた。其晩男は宿の主人に頼んで此の女 貫
ふことにした。傍へ召んで、己を忘れてしまつたか……
ど、云つてしみじみ女の顔を眺め入つて歌つた。

いにしへの匂ひはいづらさくら花散れるがご

ともなりにけるかな

女は耻かしさうに何も云はないで居た。なせ返辭をしな
い……と云ふと、涙がこぼれて眼も見えない、物も云へ
ない……と云ふのである。男は苛れつたさに又歌つた

これやこのわれに逢ふ身をのがれつゝ年月ふ

れどまさりがほなる

衣服を脱いで與へたけれども、棄てゝ逃げて行つた。何

處へ行つたやら、

昔、好色心の失せない姫さんがあつた。どうかして情
ある男に逢ひたいと思ふけれども、さうは言ひ出しかね
たから、三人の子息達をよんで、それとなく夢にかこつ
けて推量させた。上の二人は素氣なく打ち消してしまつ
たが、三郎だけは今によい男の來る兆だ……と云つて母
の意を迎へるやうに判じたので、彼れは非常に嬉しがつ
て居た。

で、姫さんは、他の男は皆薄情だ、どうかあの在五中將

に逢はせてくれ……と念じて居ると、或日思ひがけなく鷹狩の途中で行き逢つた。女は中將の馬の口を取つて、斯く斯くで……と訴へるので、中將も憐れになり、到頭其晩行つて寢た。さて其の後久しく見えなかつたので、女ははるく、其の家を覗きに行つた。垣の外に仄かに動く女の影を見て男は歌つた。

百年に一年足らぬつくも髪われを戀ふらしお

もかげにみゆ

馬に鞍を据ゑさせて、今にも出かける様子であつたから女はもう飛び立つ思ひで荆棘や柎殻の野道をいつさんに走せかへつて、家に來て寢て居た。やがて男は女のした

やうに忍んで行つて垣根から覗いて見ると、彼れは歎きながら今寢ようとしてさむしろに衣かたしきこよひもや戀ひしき人に逢はでわがねむと、歌つて居た。男はまた憐れになりその晩も寢てやつた。

——老若の區別もなくこの男はよくよく情の深い男であつた——。

昔、思ひ思はれてゐる男と女があつた。秘むべき戀な

ので二人は隠れて話すことも出来なかつた。ふと、何處からとも分らない文が來たから、不審に思つて、男、

吹く風にわが身をなさば玉すだれ隙もとめつ

ゝ入らましものを

女

とりとめぬ風にはありとも玉すだれ誰が許さ

ばか隙もとむべき

(この處おぼろげな筆で、確と事實を明らめられない。察するに作者自身に憚るべきことであつたのだらう。強いて解釋すれば、その女から寄越した艶書などの出處を何處なりけむと曖昧に書いて、さてあやしさにととぼけき

つて、事實の真相を分らなくしやうとしたものか)

昔、天子の寵を身一つに受けて、禁色の衣服までも聽

された女があつた。大御息所の從妹であつた。その時分

これも同じ宮中に仕へて居る在原といふ男のまだ幼年で

あつたのと相識つた。男は女方の御所へも出入りするこ

とを許されて居たから、朝夕その側へ行つては顔を合は

せて居た。女は斯う始終馴染んで居ては人目が悪い、御

互に破滅のもとにもなる、もう來ないやうに……と云つ

たので、男は

思ふにはしのぶることぞ負けにける逢ふにし
代へばさもあらばあれ

——逢ふことが出来たなら身の破滅も厭はない——と云
つて 女が御所から居間へ下つて來ると、一層人目も憚
からず纏綿り附いた。で、女が術に餘つて里へ行つてし
まふと、男はそれを何よりの好い事にして、又切々と通
つて行つた。皆人達は笑つてゐた。
或る日などは朝早く女の處から歸つて來るのを、あやに
く主殿寮の役人に見つけられたので、靴を脱いで奥の方
へ隠して御所へ昇つたこともある。斯やうに醜しいこと
許りして居るうちに、愈々身の破滅も近づくやうな氣が

して、怖ろしくてならない。如何したらばよいかと途方
に昏れて 神佛に祈つても見たが、なほく増す許りで
たゞもう無暗に戀しくなるのであつた。易者や巫女達を
招んで澤山の供物をして河へ祓ひにも行つた。稜をして
居ると、やたら悲しくなつて來て、一層前よりも戀しく
なつた。

こひせじとみたらし川にせし禊神はうけずも
なりにけらしな

天子は御容貌の美しい方であつた。黎明御信心の佛名を
唱へる尊い御聲などを聞くと、女はたゞ泣けてならな
つた。斯んな有りがたい君に仕へることが出來ず、あ

な悪縁の男に魅かれて居るとは、よくよく罪の深い身である……さうも思つて悲しんだ。さうかうして居るうちに天子が聞きつけて、この男を流罪に處したから、女は從姉の御息所に引き取られて御所の倉に檻禁められた。

あまの刈る藻に住むむしのわれからとねをこそ泣かめ世をば恨みじ

云つて、女が倉の中に泣いて居ると、男は流された國から毎晩來ては笛を吹き好い聲で歌を唄ふのであつた。女は倉の中に聞きながら、あれあそこに……と思ふけれども見ることもできない。

さりともと思ふらむこそ悲しけれあるにもあ

らぬ身をば知らずて

女はさう思つて男を憐れがつた。男は女に逢はれないので、相變らず笛を吹き歌を唄つて居た。

いたづらに行きては來ぬるもの故に見まくはしさにいざなはれつゝ

— 清和天皇の時であらう。大御息所は染殿の后と云つた方である —

昔、ある男が攝津に領地を有つて居たので、兄弟や友達を引きつれて難波の浦へ遊びに行つた。海岸に船の居るのを見て

なにはづを今日こそみつの浦ごとくにこれやこの世を
うみわたる船

昔、ある男が親しい人々を引きつれて、二月頃和泉の
國へ遊びに行つた。河内の生駒山を見ると、陰霽定まら
ず、雲は絶えまなく動いて居る。朝から曇つて晝に霽れ
た。雪は白く木の梢に降りかゝつた。人たちの中で只一
人が詠んだ

きのふけふ雲の立ちまひかくさふは花の林を
憂しとなりけり

昔、ある男が和泉の國へ行つた。攝津の住吉郡住吉村
住吉の濱を行くに、景色が美かつたから馬を降りて歩い
た。一人が住吉の濱をよめといふので

雁なきて菊の花さく秋はあれど春のうみべに
住吉の濱

と、詠むと、外の人たちは詠むことを止めてしまつた。

昔、ある男が、勅使を仰せつかつて、伊勢へ狩しに行

つた、その齋宮の母は氣を利かして、今度の勅使はいつもとは異つた身分の人である、よく款待してやれ……と云つてやつたから、女も特別に深切を盡くした。朝は狩に立たせてやり、晩は自分の宮へ歸つて來させるやうにした。斯うして款待して居るうちに、男はつひ云ひよる交となつた。

二日目の晩、男はどうでも逢はうと云ふ、女もやはり厭ではなかつた。けれど人眼が多いので思ふやうにならなかつた。男は使者中の主座でもあることだから、勿論遠い處へは寢て居ない、女の寢間もつい近い處であつたから、女は人を寢鎮めて置いて、夜半過ぎ男の處へ來た。

男も同じやうに眠られないので、外の方を眺めやりながら臥せつて居た。すると、月の朦つとした中に人影がする、見ると小さい童女を案内にして人が立つて居る。男はうれしくて、自分の寢間に伴つて行つて、十二時過ぎから三時頃迄一緒に居た。まだ存分話しきらぬうちに女は歸つてしまつた。男はそれから安眠もしなかつた。翌朝胸騒ぎはするが此方から使をやるわけにも行かないので、どぎまぎと不安な心持で待つて居た。

夜が明けきつて暫く経つと、女から何も言葉は無くて君や來し我や行きけむ思はへず夢かうつゝか寢てかさめてか

男は大層悲しんで詠んだ

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとは
今宵さだめよ

女の處へ持たせてやつて狩に出かけた。野山を歩いて居ても心は茫然して、只今夜こそ早く人を寝鎮めて會はうと思つて居ると、あやにくそこの國主——齋宮頭を兼務してゐる——が勅使饗應の酒宴を張つたので、一晩中飲んでしまつて一向會ふ機會もなかつた。明ければ尾張の國へ行くことになつてゐるので、男も女も人知れず泣くのだけれども仕方がない、その晩空が漸く白む頃、女の方から歌を書いた杯をよこした。取つて見ると

徒歩人の涉れどぬれぬ縁かな……
として下の句がない、男は松明の炭で書き足した。

……また逢坂の關は越えなむ
その日男は尾張の國へ行つた。

昔、ある男が、狩の使ひから歸つて來る時、大淀の渡、(伊勢)に宿つて、齋宮から來た使の童女に云ひかけた。

みるめかるかたは何處ぞ棹さしてわれに教へ
よ海士の釣舟

昔、ある男が、伊勢の齊宮に勅使として行つた時、その宮に好色の侍女がゐて内密によこした。

千早振る神の忌垣も越えぬべし大宮人の見ま
くほしさに

男は返歌した。

戀ひしくば來ても見よかし千早振る神のいさ
むる道ならなくに

昔、ある男が伊勢の女逢ふことが出來ず、このまゝ
隣國へゆくのかと恨んで居ると、女が

大淀の松はつらくもあらなくに恨みてのみも
歸る浪かな

昔、つひ其處に居るとは思ふけれど、詞も通はせられ
ない女の家の邊を歩いて、男が
眼にはみて手にはとられぬ月の中の村のごと
き君にぞありける

昔、ある男が、女を非常に恨んで、
岩ね踏みかさなる山は隔てねど逢はぬ日おは

く戀ひわたるかな

昔、ある男が、伊勢の國の女に、京へ伴れて行つて逢はうと云つたらば、女

大淀の濱に生ふてふみるからに心は風ぎぬかたらはねども

と、云つて一層愛想なくなつたから、男

袖ぬれて海人の刈りほすわたつみのみるを逢ふにて止まんとぞする

女

岩間より生ふるみるめし常ならば汐干潮みちかひもありなむ

男は又

涙にぞぬれつゝしぼる世の人のつらき心は袖のしづくか

人に逢ふことの難い女であつた——。

昔、二條の后がまだ東宮の妃と云つて居たころ、氏神(春日明神)へ參詣されたことがあつた。人達へ御下賜品のあつた時、或る近衛中將の翁も、御車から直接に頂戴し

たので、詠んで奉つた。

大原やをしほの松もけふこそは神代のことを

思ひいづらめ

さぞ心中は悲しかつたであらう、何んな思ひがしたらう

何んな思ひが？。

昔、田村天皇と申す方があつた。その時の女御に多賀
幾子といふ方があつた。薨去されて後の御佛事を、三月
の晦日に安祥寺に於いて行はれた。人たちは各供物を捧
げた、捧げ物は非常な数であつた。それを木の枝につけ

て堂の前に立てたのが、山の動き出したやうに見えた。
その頃右大將藤原常行と云ふ人が居られて、讀經が終へ
ると、歌を詠む人たちを集めて、今日の佛事を題にして
春の意を歌へと仰せられた。右馬頭であつた翁は、覺束
ない眼をしながら詠んだ。

山のみな移りてけふに逢ふことは春の別れを
訪ふとなるべし

今見ればよくもない歌であるが、その當時は秀れてゐた
と見える、皆感じてゐた。

昔、多賀幾子といふ女御があつた。薨去されて七七日の御佛事を安祥寺で行はれた。其時右大將藤原常行といふ人があつた。御佛事の歸りに、山科法親王の瀧や河を面白く構へてある御所へ立ち寄つた。永年遠くお仕へ申しては居るが、まだ直接に仕へたことはない、今夜こそお側に奉侍いたしませう……と申上げると、親王は大層喜ばれて、寢所の準備など何くれと臣下に命せられたやがて大將が御前を退つて人達に云ふには、宮仕の初めに何も献上物が無くては面目がない。さうだ、昔、父の良相の邸へ西三條の邸行幸のあつた際、紀伊の千里の濱から奇石を献上したことがある。行幸の間に遅れたので、

そのまゝ、局の溝に据ゑてある、幸ひ親王は庭がお好きだから、あの石を献上しよう……と云つて、隨身や舍人をやつて持つて來させた。間もなく運んで來たのを見ると聞いたよりも見事な石である。直に献上するのも露骨である。と云ふので、人達に歌を詠ませた。右馬頭は蒼い苔を蒔繪の形に刻んで書きつけた。

あかねども岩にぞ代ふる色見えぬ心をみせん
よしのなければ

昔、一門の者の腹に(業平の同族である)皇子が生れたの

で、其の産屋の祝ひに歌を作つた。大祖父であつた翁が詠んだ

わが門に千尋ある竹を植ゑつれば夏冬誰れか
隠れざるべき

昔、零落れた家に藤の花を植ゑた人があつた。花が美麗に咲いた。三月の晦日、雨がそぼそぼ降る中を折つて人の處へ進らうとして詠んだ。

濡れつゝぞ強ひてをりつる藤の花春は幾日も
あらしと思へば

昔、左大臣源融と云ふ方があつた。加茂河岸の六條邊に風流な家を作つて住んでゐた。十月の暮頃、菊は美しく衰へ、紅葉は種々の色に染められて居た。親王たちを御招きになつて、夜どほし酒を飲んで遊興した。夜が漸く明けて行く頃、此の風流な御殿を讚美する歌を詠んだ。そこに居合はせた醜い翁さんは板敷の下を這ひ廻つて、皆人達の詠んだ後に歌つた。

塩竈にいつか來にけむ朝なぎに釣する船はこゝによらなむ

——翁さんは嘗て陸奥へ行つてその景色の佳いのには驚いて居た。ことに鹽がまのやうな處は日本六十餘州にも無いと思つて居る、だから翁さんはこゝの御殿を推稱して鹽竈にいつか來にけむ……と驚いたやうに歌つたのである——。

昔、惟喬親王と云ふ皇子があつた。山崎の彼方の水無瀬と云ふ處に御所があつた。毎年櫻の盛に行啓されたがいつも右馬頭の人を伴つて行かれた。——もう久しい昔であるからその人の名は忘れた——。鷹狩の方は熱心にも

爲さらないで、酒を飲み歌にばかり耽つて居た。その狩場の交野の渚の院の櫻は殊に美しかつたから、その木蔭を籍いて花を折りかざしながら、君も臣も皆歌を詠んだ。右馬頭であつた人が詠んだ。

世の中にたえて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし

また、

散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき

と詠んで、木蔭を離れる頃は、もう日の暮れであつた。すると、後ればせに酒を持つて來る供達が、突然、野良

から顯はれて、又飲めと云ふから、何處か宜い所を探しながら歩いて行くと、天の河といふ處へ出た。皇子に右馬頭から杯を献じなどした。皇子は「交野を狩りて天の河のほとりに到る」といふ題で歌を詠んで杯を献せと云はれた。

狩りくらし棚機つ女に宿からむ天の河原にわれは來にけり

と、詠んで献上ると皇子は幾度も讀みかへしたが、返歌をなさらない。御供の紀有常が代つて詠んだ。

一歳に一たび來ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

御所に歸つて來ても、まだ深更まで酒を飲み話しなどしてゐた、そのうちに主人の皇子は酔つて御寝なされようとする、十一日の月も隠れようとする。右馬頭は寂しくなつた。

飽かなくにまだきも月のかくるゝか山の端に
げて入れずもあらなむ

皇子に代つて、紀有常が

おしなべて峯も平になりななむ山の端なくば
月もかくれじ

昔、水無瀬の別業に通はれた惟喬親王の例の鷹狩の御供に、右馬頭の翁が行つた。幾日も御滞在になり、やがて京都の御殿に歸つて來られた。御見送りして疾く退出しようとするど、慰勞の御酒を賜はり其上御下賜品もあるからと云つて許されない、右馬の頭は氣が急いで、

枕とて草ひきむすぶこともせじ秋の夜とだに
頼まれなくに

と、詠んだ。三月の暮のことで、其晩親王は御寢なされずにお名殘惜しさうに語りあかされた。斯うして親しく供奉してゐるうちに、突然御髪を落して小野の里に遁世されてしまつた。正月御目にかゝらうと思つて行つた

に、比叡山の麓であるから雪は非常に深かつた。押して參上して御目にかゝつたが、如何にも淋しく悲しさうにして入らつしやるのが御氣の毒で、稍暫らく伺候して、何くれと昔の思出などを御話し申上げた。寧ろこの儘御側に奉侍して居たいとは思ふけれど、公務多忙の身でそれと思ふまゝにはならない。夕暮に歸らうとして、忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけ
て君を見むとは

人懐しい涙は別れの袂を濡らさせた。

昔、或る男が、身分は卑かつたが、母は内親王であつた。長岡と云ふ所に住んで居た。子は京都に宮仕へをして居たので、思はぬではないが、さう度々母を省る暇もなかつた。が一入子であつたから鍾愛は此上もなかつた。そのうちに、十二月のこと、急な手紙が来た。驚いて見ると他の事は無くて、たゞ

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな

と、それだけ書いてある。で、忙しく馬にも乗らず出て行つた。悲しさ慌しさは道すがら物も思はせた。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈

る人の子のため

昔、或る男の幼い時分から仕へて居た皇子が、出家なされた。常は宮仕への公務もあるので心に任せなかつたが、併し正月には必ず御訪ねした、と云ふのもその好み忘れ難かつたからである。その當時奉侍した人たちは僧俗の差別なく、多勢集まつて、正月だから今日は異例だ……と云つて御酒を賜はつた。雪は紛々と降つて終日止まない。人々は皆酔つて雪に降りこめられたと云ふ題で歌を作つた。

思へども身をし別けねばめがれせぬ雪のつも
るぞ我が心なる
と、詠むと、皇子は非常に感心されて、御衣服を脱いで
賜はつた。

昔、或る少年が或る少女と、互に相契つた。各自親係
りの身であつたから、云ひ出したまゝで止めてしまつた
幾年か経て女はそれを忘れずに、あの約束を仕遂げやう
と迫つて来たから、男は何と思つたのか
今までに忘れぬ人は世にもあらしおのがさま

ざま年の経ぬれば
と、云つてやつて止めにした。その後男は女と同じ御所
に宮仕へをする事になつた。

昔、或る男が攝津の菟原郡葦屋の里に領地があつたの
で、行つて住んで居た。古歌に「葦の屋の灘の鹽焼きい
とまなみ黄楊の小櫛もさゝす來にけり」と詠んだのは此
の里のことである。男は生半宮仕へなどしてゐたから、
その關係で衛府の次官などが遊びに集まつて来た。男の
兄の人も同じ役所の長官であつた。門前の海岸などを徇

祥して遊び廻つた揚句に、その山に懸かつてゐる布引
 の瀧と云ふを見に登つた。瀧は普通のものとは異つて高
 さ二十丈廣さ五丈もある石の全面を白絹で包んだ様に流
 れ落ちて居る。その瀧の上流に藁蓋の大きさに突出した
 石があつて、水はそれから飛び散つて宛然小さい密柑か
 栗の實のやうに零れる。人々は皆歌を詠んだ。衛府の長
 官は

わが世をば今日か明日かどまつ甲斐の涙の玉

といづれまされり

主人の男は、次ぎに

ぬさみだる人こそあるらし白玉のまなくも散

るか袖のせばきに
 と、詠んだ。餘りの腰折れで傍の人達は可笑しかつたで
 あらう、それ限り歌を止めてしまつた。瀧からの歸りは
 道が遠く、故の宮内卿の門前にかゝる頃日が暮れた。我
 が家の方を眺めやると、折しも漁火が點々と散らばつて
 居る。主人の男は詠んだ。

晴る、夜の星か河邊の螢かもわが住む方の海
 人の燃く火か

家に歸つて来た。其の晩南風が吹いて浪は非常に高かつ
 た。翌朝家の女達は濱へ出て、浪に打ちよせられた海松
 を拾つて持つて来た。それを高杯に盛つて榊の葉で掩つ

て出した。その葉に斯う書いた。

わだつみのかざしにさすと齋ふ藻も君がため
には惜まざりけり

田舎物の歌としては佳いか、悪いか？。

昔、中年の男達が集まつて月見をした。その中の一人
が歌つた。

おほかたは月をもめでしこれぞこの積れば人
の老となるもの

昔、身分ある男が、自分よりは又一層高貴な女に懸想
して幾年か経た。

人知れずわれ戀ひ死なば味氣なく何れの神に
なき名負はせむ

昔、或る男がある薄情な女を、如何かして手に入れや
うと思ひ悩んだ。女も哀れが身に泌みたのであらう、で
は明日物越しに話だけ交はさうと云つたのを、男は限り
なく喜んだが、しかしまだ疑はしかつたから、面白い櫻

の枝えだに附つけて云いつてやつた。

さくら花はなけふこそかくは匂にほふともあな頼たのみが

た明日あすの世よのこと

尤もつともな言いひ分ぶんであらう。

昔ひかし、徒いたづらに月つき日は過すぎて思おもふ事ことの満みたぬ男をとこが暮ほしゆん春くわうの光

景けいを眺ながめて歌うたつたし。

惜をしめども春はるのかぎりのけふの日の夕ゆふぐれにさ

へなりにけるかな

底そこの心こころを知しつてくれる人ひとも無ないのか。

昔ひかし、或あるる男をとこが戀こひしさに訪たづねては行ゆくが、逢あはずに歸かへつて來きて、手紙てがみもやらずに居ゐる女をんなの處ところへ云いつてやつた。

葦あし邊べこぐ棚たななし小舟せうねいくそたびゆきかへるら
む知しる人ひとなしに

昔ひかし、身み分ぶんの卑いやしい男をとこが、高こう貴きな女をんなを戀こひして居ゐたが、聊いささか靡なびく風かぜもなかつたので、懊惱おうなうの餘あまりに詠いんだ。

おふなく、思おもひはすべしなぞへなく高たかくいやしき苦くるしかりけり

—昔ひかしも今いまも人ひと情じやうに變かはりは無ないと見みえる—

昔、相思ふ男女があつた。如何いふ譯か、男の方から通はずになつた。その後また男が出来たけれども、しかし子さへある交情であつたから時々手紙など寄越した。繪を描く女であつたから、ある時扇を持たせて描きにやつたが、例の男が来て居るので、直ぐには描いて寄越さなかつた。男は描かないのも道理だとは思ふが、それでも不平は堪へ難かつたであらう、詠んでやつた。

秋の夜は春日忘るゝものなれば霞に霧や立ちまさるらむ

時は秋であつた。女は返しに

千々の秋一つの春にむかはめや紅葉も花もと
もにこそ散れ

昔、二條の後に仕へて居た男があつた。同じ御所に勤めて居る女と常に見交はして居たので、一夜通つて行つた。如何か物越しにでも可い、會つて胸にあまる日頃のもどかしさを云はせて呉れ……と云つたから、女は忍んで物越しに對面した。種々話などした後、男が彦星にこひはまされり天の川へだつる闇を今

はやめてよ
と、歌つたのを、女はしみじみと感じ入つてその晩男に許した。

昔、或る男が久しい間女を戀ひして居た。女も岩木ではない、思ひやりの心は自づと愛情に移つて行つた。するとその六月の半頃、女は腫物に悩む身となつたので、斯う云つて寄越した。「今私は貴方を思ふと云ふことより他に何も無い、けれども身に病ひもあり、時節も暑い盛りである、秋風でも吹く頃になつたらば、必らず御目に

かゝりに行きませう……
秋は来た。女は自分の秘密——男の處へ行くと云ふこと——を父に知られて口喧しく叱られた上、兄の家へ預けられることになつた。女は楓の初紅葉を拾はせて、それに書きつけた。

秋かけて云ひしながらもあらなくに木の葉降りしく縁こそありけれ

男が来たならば遣れ……と云つて出て行つた。其の後如何なつたのか、女は安否は勿論行衛さへ分らずになつた。男は非常に憤つて逆手を拍つて女を呪咀つた。

昔、堀河太政大臣と云ふ人があつた。九條の邸にて四十の賀を行はれた日、例の中將の翁が櫻ばな散りかひくもれ老いらくの來むと云ふなる道まがふがに

昔、或る太政大臣に仕へて居る男が、九月頃のこと、梅の造花に雉子を附けて献上した。我がたのむ君がためにと折る花は時しもわかぬものにぞありける

太政大臣は非常に珍らしがつて使者に賞與を取らせた。

昔、右近の馬場の謁折の日に、對ひの物見の下に据ゑた車の下簾から女の顔が微かに透けて見えたから、例の中將であつた男が詠んでやつた。

見すもあらず見もせぬ人のこひしくばあやなく今日や眺めくらさむ

その女の返歌に

知る知らぬ何かあやなく分きて云はむ思ひのみこそしるべなりけれ

—その後女の誰れであるかゞ分かつた—。

昔、或る男が後涼殿と清凉殿との間を通つて行つたらば、或る高貴な女の方が部屋から萱草を差し出して、之れを忍ぶ草と云ふか……と言つて賜はつたから、わすれ草生ふる野邊とは見るらめどこは忍ぶなり後もたのまじ

昔、左兵衛督在原行平と云ふ人があつた。その家に醇

い酒があると聞いて、殿上人達が飲みに来た。其の日左中辨藤原良近と云ふ人を主賓にして饗宴を張つた。行平は趣味を解する人で、瓶に花を挿して興を添へた。その中に交つて居た藤の花房は三尺六寸ほどあつた。それを題にして歌を詠んで居ると、主人の弟が饗宴のことを聞いてやつて来たので、捕へて歌を詠ませた。もともと歌のことは知らないから、辭退したけれども強いて詠めと云ふので、斯う云つた。

咲く花の下にかくるゝ人おほみありしにまさる藤のかげかも

如何いふ意味だと云ふから、いや別事でもない、太政大

臣——藤原忠仁公——が世に在るので藤原氏が殊に繁榮を極めるのを詠んだのだ……と云つたらば、一座の人々も歌の悪口を言はずにしまつた。

昔、歌は作らなかつたが、よく人情の哀れを解して居る男があつた。其の當時或る貴族で、世の中が厭やになり、京都を逃れて寂しい山間に尼生活をしてゐる女があつた。男と同族の好みがあつたので詠んでやつた。そむくとて雲にも乗らぬものなれど世の憂きことぞよそになるてふ

昔、深草帝に仕へてゐる男があつた。非常に忠實な性質で少しも浮いた處がなかつたが、如何云ふ心の過ちか親王方の侍女と相思の間になつた。……でその翌朝、昨夜の思ひ出を詠んで贈つた。

寝ぬる夜の夢をはかなみまごろめばいや果敢くもなりまさるかな

昔、別に事情があるのでなくて尼になつた女があつた

貌は消したけれども、猶世の中が懐かしいので、賀茂の祭見に行つた。それをある男が

世をうみのあまとし人を見るからに目交せよ
とも思はゆるかな

昔、或る男が斯うして居たらば死ぬより外ないと云つてやつたのを、女

白露は消なば消な、む消えずとも玉に貫くべ
き人もあらしを

男は不人情を憤つたけれども、戀しさは一入増さつて來

た。

昔、或る男が、皇子たちの逍遙の御供に詣つて、立田川の水邊に立つて歌つた。

千早ぶん神代も聞かず立田川からくれなるに
水くゞるとは

昔、生半「品振つた男の家に、或る女を召使つて居た内記藤原敏行がそこへ通つて行つた。女は容貌は美しか

つたが、まだ年若で艶書も満足には書けず、文の詞の使ひやうも知らなければ、況して歌は詠めなかつた。で、主人の男がいつも艶書の草稿を作つて呉れてゐた。内記はそれとは知らず見ては感心して居た。或る時

つれづれのながめにまさる涙川袖のみ濡ちて逢ふよしもなし

と、云つてやると、女のために例の主人の男が返歌を作つた。

浅みこそ袖は濡づらめ涙川身さへ流るときか

ば頼まむ

内記は見て、限りなく喜んで、それを文箱に入れて諸處

を持ち歩いて見せた。やがて内記は女と逢ふ機会を得たが、その後暫く経つて斯う云ふ手紙を遣はした。「行かうくとは思ふが、雨がふりさうなので躊躇してゐる。とても冥加の無い身なのであらう、斯う雨にばかり妨げられるのは……そこでまた主人の男が女に代つて

かすかずに思ひおもはずとひがたみ身をする雨はふりぞまされる

と、詠んで返すと、内記は簑笠も着ずに雨に濡れしよばたれて來た。

昔、或る女が男を恨んで

風吹けばとはに浪越す岩なれやわが衣手のか
わくときなき

と、平生口癖のやうに云つて居たのを、男が聞いて
宵ごとにかはづの數多啼く田には水こそまさ
れ雨はふらねと

昔、或る男が戀人に死なれた友人の處へ

花よりも人こそ空になりにつれ何れをさきに
戀ひむと見し

昔、或る男の人知れず通ふ女があつた。その女の處か
ら、今假寐したらば貴方が夢に見えました……と云つて
來たから

思ひあまりいでにし魂のあるならむ夜ふかく
見えば魂交びせよ

昔、ある男が身分ある女の處へ、亡くなつた人を吊ふ
風にして言つてやつた。

いにしへはありもやしけむ今ぞしるまだ見ぬ
人を戀ふるものとは

昔、薄情な女へ或る男から

こひしとは更にも云はじ下紐の解けむを人は
それと知らなむ

女からの返しに

下紐の験とするもあらなくに斯かるかごとは
掛けずぞあるべき

昔、ある男が鰥の境遇に居て
長からぬ命のほどに忘るゝは如何にみじかさ
心なるらむ

昔、仁和帝が芹川に行幸して鷹狩をなされた時、ある
翁が年に似合はない事とは思ふが、以前の経験もあるこ
とだから大鷹の鷹匠として供奉した。その日は袂に鶴の
形を縫ひつけた摺狩衣を着て行つた。

翁さび人などがめそかり衣けふ許りぞと鶴も

なくなると
天子の御機嫌は例になく悪かつた。實は我が身の老いを
嘆いたのに同じ老人達は、自分のこと、思ひ僻んだので
あらう。

昔、陸奥の國に或る男と女が住んで居た。男は都へ行
つてしまはうと云ふ、女は非常に悲しがつた。せめて饞
別をしやうと云つて、興の井、都島と云ふ處で酒を飲ん
た。

おきのる(熾火)て身を焼くよりもかなしきは都

島邊の別れなりけり
女の歌ふのに催されて、男はそこに留まつた。

昔、或る男が案外に、遠い陸奥の旅へさ迷つて、京都
の妻女に云つてやつた。

浪間より見ゆる小島の濱びさぎ久しくなりぬ
君に逢ひ見で
旅に出て眞の愛情といふものが分つた……と云つてやつ
た。

昔、何の天皇であつたか、住吉に行幸なされて
わが見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代
へぬらむ

と、詠んだ。すると明神が顯現れて

むつまじと君はしらすや瑞垣の久しき世より
齋ひそめてき

昔、久しく音信もしないが、さりとして絶れる積りもな
い男が、來ると云つてきたから、女、

玉かづらはふ木あまたになりぬれば絶えぬ言
葉のうれしげもなし

昔、去られた女が、その男の形見に遺した物を見て、
形見こそ今はあだなれこれなくば忘るゝ時も
あらましものを

昔、まだ若くて男といふ者も知るまいと思つて居る女
が意外にも世馴れて居るのが分つたので、或る男が、

近江なる筑摩の祭とくせなむつれなき人の鍋
のかす見む

昔、梅壺内裏の部屋から雨に濡れて出てゆく人
を見て、或る男

うぐひすの花を縫ふてふ笠もがな濡るめる人
に着せてかへさむ

返歌

うぐひすの花を縫ふてふ笠は否、おもひ(火)を
附けよ乾してかへらむ

昔、相契つた間であるのに、それを忘れてしまった女
に、男から

山城の井手の玉水手にむすびたのみしかひも
なき世なりけり
と、云つてやつたけれど、女の返事はなかつた。

昔、或る男があつた。深草に住んで居た女に、厭氣が
さして来たので

年を経て住みこしやどを出でいなばいと
深草野とやなりなむ
女は返しに

野とならば鶉となりて鳴き居らむかり(狩)にだ
にやは君は來ざらむ
男は歌の心に感じ入つて深草を立ち去ることを止めにし
た。

昔、或る男が、如何いふことを思つた折であつたか、
斯う嘆いた。

思ふこと言はでぞたゞに止みぬべき我れとひ
としき人しなれば

昔、或る男が病氣に惱んで、今死なうとする時に
つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけ
ふとは思はざりけり

(11)

新譯伊勢物語
著者 太田貞一
發行所 東京市京橋區銀座三丁目八番地
粉山仁三郎
印刷者 東京市芝區芝町三丁目二番地
小松周助
印刷所 東京市芝區芝町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

新譯伊勢物語

大正二年十月廿五日印刷

大正二年十月三十日發行

定價金五拾錢

著作者

太田

貞一

發行所

東京市京橋區銀座三丁目八番地
粉山仁三郎

印刷者

東京市芝區芝町三丁目二番地
小松周助

印刷所

東京市芝區芝町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

發行所

東京市京橋區銀座三丁目
振替貯金 東京二四一七番

粉山書店

大阪市中心橋筋淡路町南
振替貯金 大阪一三六八六番

東京・京都・大阪

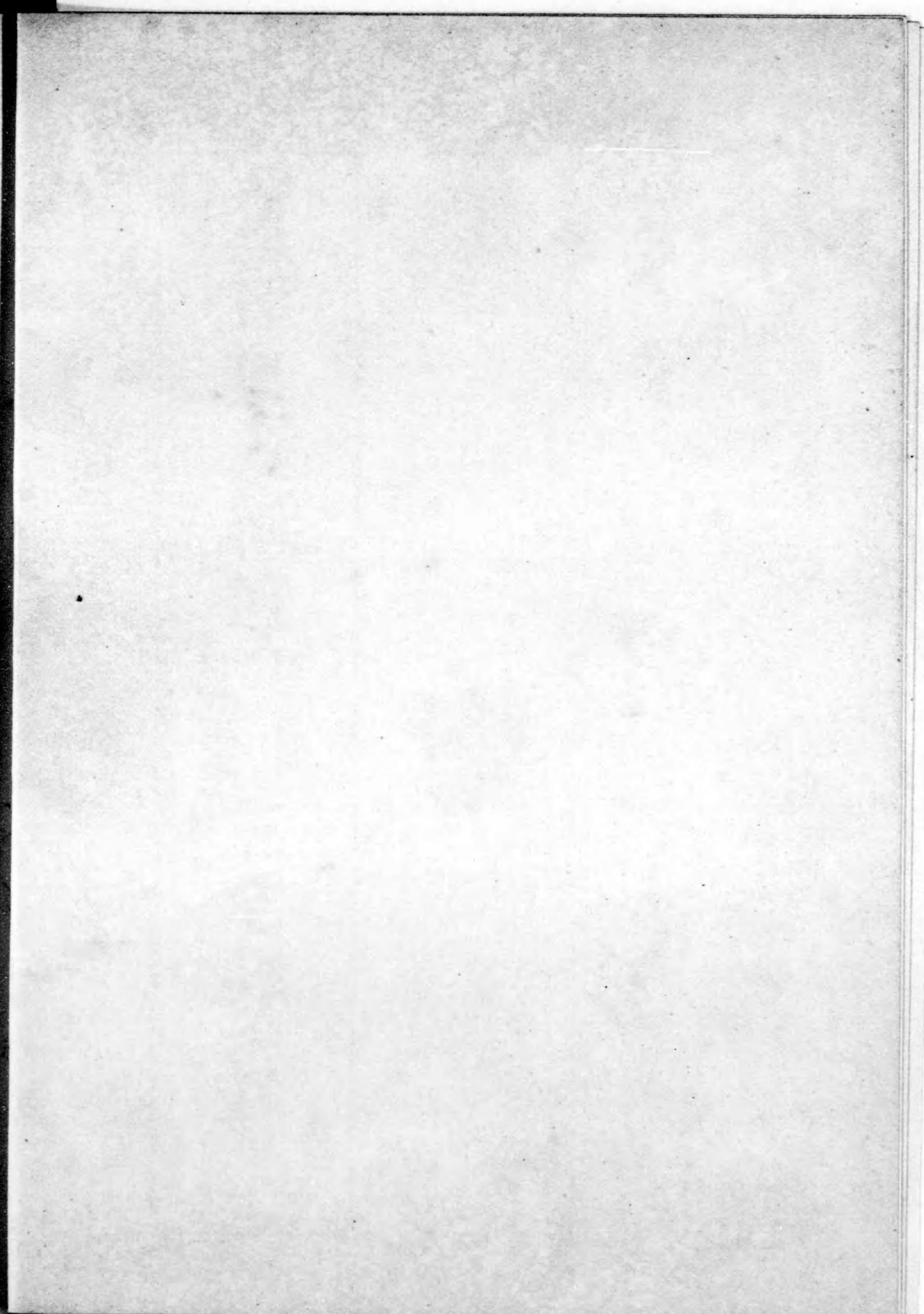
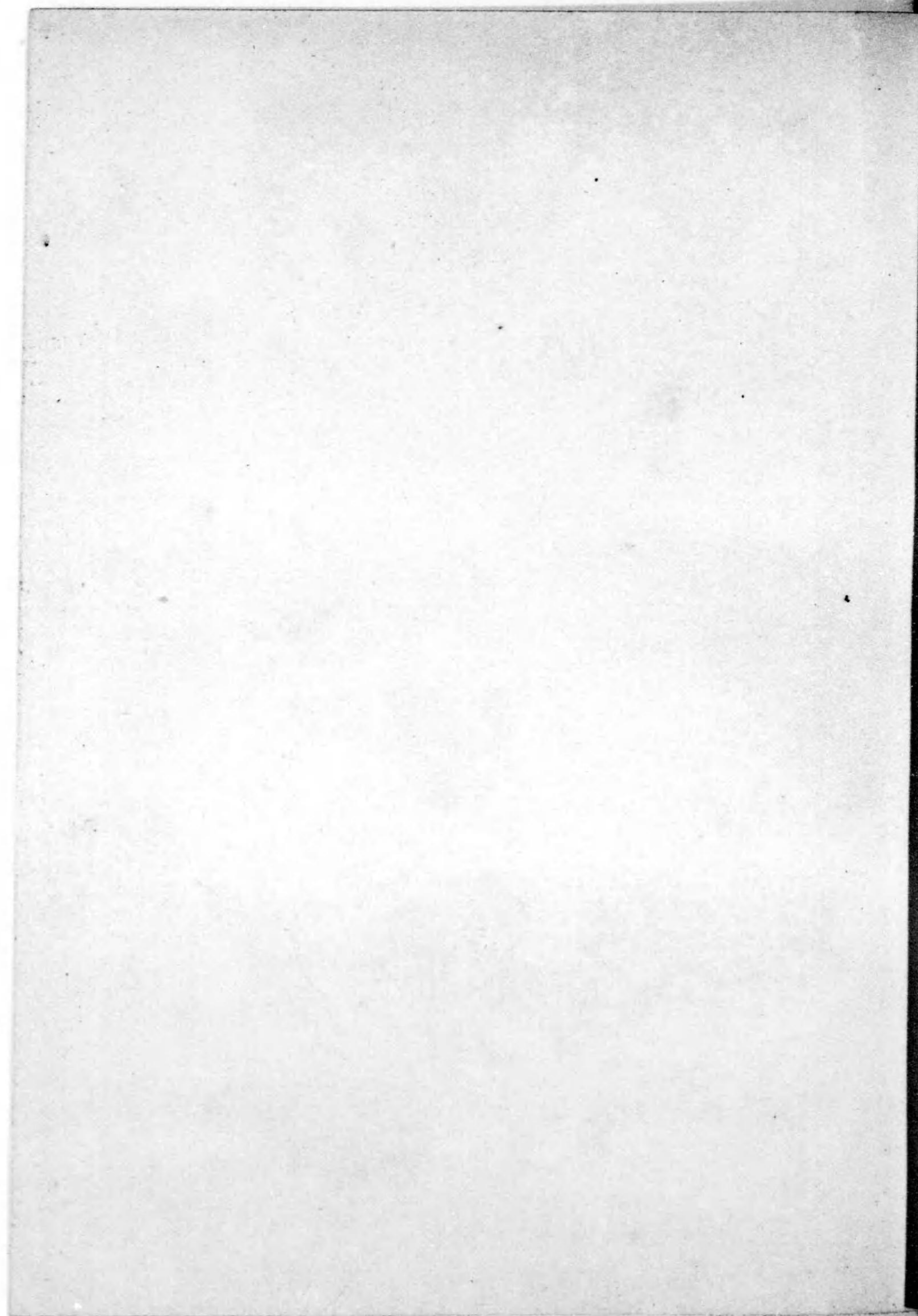
京都市御幸町通二條下ル
振替貯金 大阪二〇八九二番

新釋奥の細道

縣立福井
中學教諭

三宅邦吉著

錢拾五價定



274
524

終

